2004 年度 委員会活動成果報告

（2005 年 2 月 25 日作成）

委員会名	都市史小委員会	主 査 名：初田　亨
所属本委員会 （所属運営委員会）	建築歴史・意匠委員会	委員長名：陣内　秀信
設　置　期　間	2004 年 4 月　～　2006 年 3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画	近年、日本はもとより、欧米ばかりかアジア、イスラーム世界など、海外での都市史研究の蓄積も顕著になり、各地で国際会議や研究会が開催され、外国との研究交流も様々な形で芽生えつつある。都市史の領域はそもそも、多くの学問領域との重なり、接点をもつものであり、建築以外の他分野との学際的交流も活発に行われるようになっている。 ① こうした時期にあって、総合的に都市史研究を進展させるために、方法論や情報の交換・蓄積を行うセンター機能を学会に設ける目的で、建築歴史・意匠委員会の小委員会として、「都市史小委員会」が１９９９年４月に誕生した。既往の都市史に関する研究を各分野ごとに収集、蓄積し、研究の到達点の認識と今後の研究活動を明確にする。 ② 時代・地域別の都市史研究を横断的に繋ぐとともに、方法論を豊富化するための研究会・シンポジウムを定期的に開催する。 ③ 外国人研究者の招聘等を通じて、都市史研究における国際交流の活発化をめざす。 ④ 従来分散的に行われてきた各時代・地域の都市史の成果の蓄積を横断的かつ総合的にとりまとめ、公開シンポジウムの記録冊子、研究文献リスト集、出版物（たとえば都市史叢書等）によって公表する。 年次計画：2002 年度以降は「伝統都市の転換期」をテーマに掲げてシリーズ化してシンポジウムを開催している。2003 年度までに、中世―近世、近世－近代について取り上げてきた。2004 年度は、それらを受け、近代－現代を対象とする。なお、このシリーズは、2005 年度の古代－中世をもって一応の完結をみる計画である。	
委員構成 （委員名（所属））	泉田英雄（豊橋技術科学大学）、伊藤毅（東京大学）、伊藤裕久（東京理科大学）、川本重雄（京都女子大学）、越沢明（北海道大学）、陣内秀信（法政大学）、高橋康夫（京都大学）、高村雅彦（法政大学）、玉井哲雄（千葉大学）、中川理（京都工芸繊維大学）、野口昌夫（東京藝術大学）、初田亨（工学院大学）（主査）、松本裕（大阪産業大学）（幹事）、宮本雅明（九州大学）、山田幸正（東京都立大学）	
設置 WG （WG 名：目的）	なし（設置検討中）	
2004 年度予算	230,000 円	

項　　目	自己評価
委員会活動状況 （開催日・参加人数）	２００４年１２月８日、10：00-17：00、建築会館会議室 シンポジウム「伝統都市の現在－近代から現代へ」開催 参加者：４３名（内訳/会員２０名、学生２３名）
得られた成果	（成果の具体的内容、成果の学術的・技術的・社会的価値、ホームページ等での公開の有無） 12 月 8 日 10 時より予定通り都市史小委員会シンポジウム「伝統都市の現在－近代から現代へ」が開催された。発表内容概要は次のとおり：(1) 伊藤毅氏により、1960 年代における都市の転換に大きな影響を与えた研究や動向が詳しく整理され、その上で、「都市の基層」といった考え方や「複数文化共存による都市の強靭な生命力」といった今後都市史研究が取り組むべき課題が明示された。(2) 高村雅彦氏からは、中国現代都市計画で盛んに試みられている「復古」の手法の事例と、それが中国各地に画一的に展開されることの危険性が指摘された。(3) 山田幸正氏は、中東レバノン・サイダにおいて複雑な文化的・政治的・宗教的背景をかかえつつ旧市街と新市街が形成されていく過程のダイナミズムが示された。(4) 陣内秀信氏からは、南イタリアの特に港町において歴史的街区が、「歴史」と「自然」を軸とする現代都市再生プロジェクトを通じて荒廃から更正され、市民や周辺都市住民にとってかけがえのない憩いの場となり活き活きとしたコミュニティーを取り戻した事例と都市再生の手法が詳細なサーヴェイを背景に報告された。(5) 宮本雅明氏からは伝統建造物群の調査における歴史的特性、空間的特性、景観的特性の把握に関して説明がなされ、空間的特性をいかしつつ新しい創造への可能性について詳細に論じられた。　以上の報告に対しては、それぞれ委員によるコメントが行われると共に、総合討議において参加者も交えた活発な質疑応答がなされ、近世と近代の転換期に対する立場の違いへの配慮や 1920 年代への言及の必要性などが指摘された。 委員会 HP アドレス：（開設検討中）
目標の達成度	（当初の活動計画と得られた成果との関係）

	上記の設置目的①－④のうち、これまで ① ②に関しては、1999 年のシンポジウム『都市史研究の可能性を探る』において都市史研究を取り巻く現状を整理しそれらへのアプローチの可能性を探ることから始めた。その後も各シンポジウムやパネルディスカッションを通じてこの点は継続して探求されている。 ③ に関しては、2000 年度に特別講師リチャード・プランツ(Richard PLUNZ)（コロンビア大学 教授･アーバンデザインコースディレクタ)氏を招き､『ニューヨーク都市』というテーマで特別講演会を実施した。 ④ に関しては、2002 年度シンポジウム「伝統都市の転換期　中世から近世へ」梗概集と合わせて 1999 年度、2001 年度のシンポジウム梗概・資料を再編集し掲載した。また、2003 年度日本建築学会大会（東海）建築歴史・意匠部門、都市史小委員会パネルディスカッション『日本の都市の特質』の冊子、2003 年度シンポジウム「近代都市の転換期－近世から近代へ－」梗概集、2004 年度シンポジウム「伝統都市の現在－近代から現代へ－」梗概集をそれぞれ編集し発行した。 このように、都市史小委員会設立時に掲げられた目的は、着実に成果へと結びついている。また、パネルディスカッションやシンポジウムはいずれも盛会であったことなどにも鑑みて、都市史小委員会の活動は十分に意義あるものと考えられる。
その他評価すべき事項	大会学術講演の発表部門として建築歴史・意匠の中に「都市史」のカテゴリーが確立され、小委員会の活動がより開かれた形となり、盛んな研究発表が行われるようになったこと。